九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？ ： ４カテゴリー（強制選択式，多項目式）と３カテゴリー（多項目式）との対応性

中尾，達馬
九州大学大学院人間環境学府

加藤，和生
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/889

出版情報：九州大学心理学研究. 4, pp.57-66, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2003, Vol.4, 57-66

成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？[1)]

――4カテゴリー（強制選択式，多項目式）と3カテゴリー（多項目式）との対応性――

中尾　達馬[2)]　九州大学大学院人間環境学府
加藤　和生　九州大学大学院人間環境学研究院

How do adult attachment scales relate to one another?
―The correspondence between four-category (forced-choice, multiple-choice) and three-category (multiple-choice) scales―

Tatsuma Nakao (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Kazuo Kato (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

Many different adult attachment style scales have been developed. Those scales were classified either into four-category or three-category attachment style scale and the forced-choice or multiple-choice format scale. Comparisons and integration of the previsous and new findings from adult attachment studies, using different types of scales, necessitate the careful examination of the correspondences among them. Although the correspondences between the 3- and 4-category scales in the forced-choice format have been demonstrated, such examininations for the multiple-choice format remain almost intact. This study, therefore, investigated the following unexamined correspondences: (1)Two dimensions of four-category attachment model as calculated from RSQ (Griffin & Bartholomew, 1994)/RQ (Bartholomew & Horiwitz, 1991) and three factors as computed from Toda's 3-category attachment scale, (2)4-categorical attachment styles as determined by RQ and Toda's 3 factors, (3)4-category attachment scales in the forced-choice (RQ) and multiple-choice (RSQ) format. 211 college students participated in this study. As a result, the correspondence of (3)was demonstrated, and those of (1) and (2)were partly demonstrated. Three factors in three-category scale were discussed from the perspective of the two dimensions of four-category attachment model.

Keywords: Adult attachment style, correspondences among scales, four- vs. three-category models, forced-choice vs. multiple-choice format, college students

親密な対人関係の成人愛着研究では，これまでに，尺度形式（e.g.，強制選択式，多項目式）や因子数の異なる愛着スタイル尺度が数多く開発されてきている。それらの尺度は，3カテゴリー尺度か，4カテゴリー尺度かの2つに大きく分類することができる。

近年は，成人の愛着スタイル[3)]を測定する際に4カテゴリー尺度を用いることが多くなってきた[4)]。しかし，初期の成人愛着研究では，主に3カテゴリー尺度が用いられていた。そのため，各々の尺度を用いて得られた知見を統合的に理解するためには，それらの対応性を検討

1) 本研究は，科研・基盤研究（B-2）一般（代表：加藤和生，H13-15年度，課題番号：13410039）の援助を受けて行われました。また，本研究は九州大学大学院人間環境学府に提出した修士論文（1999年）の1部に加筆・修正を行ったものであり，九州心理学会第63回大会（久留米大学）において発表を行いました。
2) 本研究を行うにあたりご指導下さいました九州大学丸野俊一先生，京都大学遠藤利彦先生に心より感謝申し上げます。また，本研究を行うにあたりいろいろとご協力・アドバイスをして頂きました笠原正洋先生，假屋園昭彦先生，藤田敦先生，研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。最後に，調査にご協力下さいました被験者の皆様方ご協力ありがとうございました。この論文への問い合わせ先は以下の通り：nakaoedu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp
3) 愛着スタイルとは，厳密には，観察可能な愛着行動パターンのことであり，それらの行動パターンを形成している内的作業モデル（Internal Working Models; 観察できない）を意味するものではない（Fraley & Shaver, 1998）。しかし本研究では，Fraley & Shaver (1998) と同様に，成人愛着研究の慣習に従って，“愛着スタイル”を“愛着の内的作業モデル”という意味で用いる。
4) その理由としては，次の2つが考えられる。すなわち，(1)Brennan, Clark, & Shaver (1998) が行った既存の14の愛着スタイル尺度（60のサブスケール，323項目）についての2次的因子分析により，自己観に対応した“見捨てられ不安（Anxiety）”と他者観に対応した“親密性の回避（Avoidance）”の2次元が抽出された。そして，それら2つの次元は，Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) により明らかにされた次元と概念的に重なり合う（Brennan et al., 1998）。(2)4つの愛着スタイル群は，2つの次元により簡単に概念化することができる（Fraley, Garner, & Shaver, 2000）。

することが必要である。また，近年4カテゴリー尺度が主に用いられてきていることを重視するならば，4カテゴリー尺度で測定される愛着スタイルのいずれに3カテゴリー尺度の愛着スタイルが対応するのかを検討する必要があるだろう（中尾・加藤，2002a）。

そこでまず，4カテゴリーと3カテゴリーの愛着スタイル尺度がそれぞれどのような考え方にもとづき開発されたのかについて概観する。次に，両者の対応関係はどのように理論的に想定されたのか，またどのように実証されたのかについて述べる。

3カテゴリーの愛着スタイル尺度（多項目式）は，Hazan & Shaver（1987）の強制選択式尺度にもとづき，数多く開発されてきた。彼女たちは，Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall（1978）による幼児の3つの愛着分類（attachment classifications）にもとづき3つの愛着スタイルを測定する尺度を構成した：安定型（Secure），アンビバレント型（Anxious/ambivalent），回避型（Avoidant）。

一方，4カテゴリーの愛着スタイル尺度（多項目式）は，Bartholomew & Horowitz（1991）が開発した強制選択式尺度のRQ（これは“関係尺度”の略である[5]）にもとづき，開発された。彼女たちは，Hazan & Shaver（1987）の尺度を受けながらも，愛着スタイルをBowlbyの理論にもとづき整理し直し，それを測定するためのRQを開発した。というのは，Bowlby（1973）の愛着理論では，愛着の内的作業モデル（Internal Working Models，以下IWMと略す）は，愛着場面での自己と他者の相互作用が繰り返されることを通して形成されると想定されていたからである（p.204）。そこで彼女たちは，Bowlby（1973）のこの想定にもとづき，“自己観（自己についてのIWM）”と“他者観（他者についてのIWM）”がそれぞれポジティブかネガティブかにより4つの愛着スタイルを構成するモデルを提出した（詳細はFig.1参照）。

その際，Bartholomew & Horowitz（1991）は，Hazanらの3カテゴリー愛着スタイル尺度とRQ（4カテゴリー愛着スタイル尺度）について，以下の対応性を理論的に想定していた（p.227）。すなわち，Fig.1に示すように，Hazanらの3カテゴリー尺度での安定型，アンビバレント型，回避型はそれぞれ，自分たちのRQでの安定型，とらわれ型，恐れ型に対応する[6]。

だが，彼女らはその対応性を未だ実証的には検討して

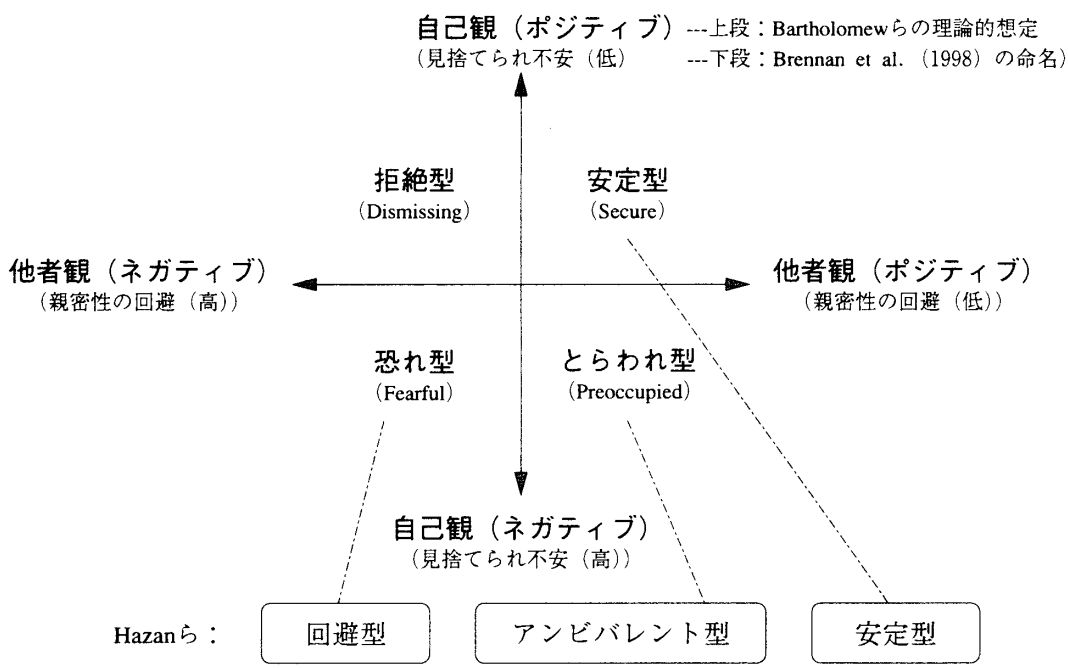

Fig.1　Bartholomewらの4カテゴリー愛着スタイルモデルと3カテゴリー愛着スタイル尺度の理論的対応性[a]

（Bartholomew & Horowitz（1991）とBrennan et al.（1998）をもとに作成）

a）点線は，Bartholomewらの4カテゴリー愛着スタイルモデルとHazanら（1987）の3カテゴリー尺度の理論的対応性を示す（Barholomew & Horowitz，1991）.

[5] RQは，“Relationship Questionnaire”の略である（Bartholomew & Horowitz, 1991, p.229）。

[6] Bartholomew & Horowitz（1991）は，拒絶型を成人愛着面接（Adult Attachment Interview, AAI, Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）の愛着軽視型（Dismissing）の特徴にもとづき設定している。

Table 1
本研究で用いる尺度

尺度名	開発者	尺度形式	カテゴリー数[a]	次元数
RSQ	Griffin & Bartholomew（1994）	多項目式	なし	2（見捨てられ不安，親密性の回避）
RQ	Bartholomew & Horowitz（1991）	強制選択式[b]	4（安定型，拒絶型，とらわれ型，恐れ型）	2[c]（自己観，他者観）
IWM尺度	戸田（1988）	多項目式	なし	3（安定型得点，アンビバレント型得点，回避型得点）

[a] RSQは4カテゴリー尺度，IWM尺度は3カテゴリー尺度であるが，基本的にはこれらの尺度から被験者のカテゴリカルな愛着スタイル（e.g.，安定型）を決定することはできない．なお，RSQを2次元モデルではなく4カテゴリー尺度と呼ぶのは，RSQの2次元の組合せにより，4つの愛着スタイル群について考察を行うことができるためである．
[b] 4つの愛着スタイルそれぞれについて評定を行った後，最も当てはまる愛着スタイルを1つ強制選択する．
[c] RQの4つのスタイルそれぞれに対する自己評定値からの自己観得点と他者観得点の算出方法（Griffin & Bartholomew, 1994, p.29）
自己観得点＝（安定型＋拒絶型）　－　（とらわれ型＋恐れ型）
他者観得点＝（安定型＋とらわれ型）　－　（拒絶型＋恐れ型）

いないため，両尺度の明確な対応関係が不明瞭のままとなっている。そのため，そのことが3カテゴリー尺度を用いた研究と4カテゴリー尺度を用いた研究の結果を比較・検討したり，同じ土俵の上で議論することを困難としている。愛着スタイルという共通の土俵に立って議論を進めるためには，3カテゴリー尺度と4カテゴリー尺度との対応性を実証的に検討することが重要である。特に日本では，成人愛着研究のほとんどにおいて，多項目式の3カテゴリー尺度（e.g.，戸田，1988）が用いられてきたため，その対応性を検討することが必要不可欠である（中尾・加藤，2002a）

しかし，このような問題意識に立ち，これらの尺度間の対応性を実証的に検討した研究は，著者の知る限り次の2つしかない。それでは，これらの研究からはどのような結果が得られたのだろうか。

Brennan, Shaver, & Tobey（1991）と大石・宇恵（2000）は，大学生を対象に，強制選択の4カテゴリー尺度（RQ）と3カテゴリー尺度（Hazan & Shaver, 1987）の対応性を検討した。その結果，(1) 4カテゴリー尺度で安定型と分類された者のうち約82%は，3カテゴリーの安定型であった。また，(2)とらわれ型と分類された者のうち約57%はアンビバレント型であった。(3)恐れ型と分類された者のうち約61%は回避型であった。Brennan et al.（1991）は，(2)と(3)の結果では一致率が低いことの理由として，次のように主張している。すなわち，Fig 1のある1つのセルに本来入るべき被験者がそのセルに隣接する他の2つのセルにも分かれて入ってしまうため，結果的に愛着スタイル間の一致率が低くなってしまうためと考えられている（例えば，3カテゴリー尺度でアンビバレント型に分類されていた者は，RQではとらわれ型だけでなくそれと近接する2つのセル（恐れ型や安定型）にも分類されてしまっていた）。こうした問題はあるにせよ，Brennan, et al.（1991）は以上の結果から，尺度形式が強制選択式である場合の3カテゴリーと4カテゴリーの愛着スタイル尺度間の対応性は確認できたと考えている。

だが，これらの研究は強制選択式でしかこの対応性を検討していない。そのため，次の3つの対応性がなおも不明瞭のままになっている。すなわち，(1)次元（因子）間の対応性：4カテゴリー愛着スタイルを構成する2次元（自己観，他者観）と3カテゴリー愛着スタイルのそれぞれに対応する3次元（i.e.，安定型得点，アンビバレント型得点，回避型得点）との対応性（以下では，4カテゴリー愛着スタイルを構成する2次元を“4カテゴリーの2次元”，3カテゴリー愛着スタイルのそれぞれに対応する3次元を“3カテゴリーの3因子”と略す），(2) 4つの愛着スタイル群と3次元の対応性：RQの強制選択にもとづく4つの愛着スタイル群と3カテゴリーの3因子との対応性，(3)尺度形式間の対応性：4カテゴリー尺度における尺度形式間（強制選択式，多項目式）の対応性（3カテゴリー尺度ではその対応性は確認されている（詫摩・戸田，1988））の3つである。

そこで本研究では，これら3点を検討する（本研究で用いる尺度は，Table 1参照）。具体的には，(1) 4カテゴリーの2次元を，BarholomewらのRQ（強制選択式）とGriffinらの“多項目式関係尺度（以下，RSQ[7]と略す）

(Griffin & Bartholomew, 1994)”[8]からそれぞれ算出し，それらの得点と多項目式の3カテゴリー尺度である戸田の“内的作業モデル尺度（以下，IWM尺度と略す）（戸田，1988)”の得点との相関を検討する。(2)RQの強制選択にもとづき分類された4つの愛着スタイル群が，IWM尺度得点においてどのように異なるのかを検討する。

(3)日本においてはGriffinらのRSQははじめて用いられるので，まず，その因子的妥当性を確認する。次に4カテゴリー尺度における多項目式（RSQ）と強制選択式（RQ）を比較・検討することで，尺度形式間の対応性を検討する。

Fig.1で示したBartholomew & Horowitz（1991）の4カテゴリー愛着スタイルのモデルにもとづき，8つの仮説（Table 2）を設定した。なお，以下では，RSQの2因子を，RSQを用いた他の研究（e.g., Roberts & Noller, 1998）に従い，自己観に対応する“*見捨てられ不安*（*Anxiety*)”と他者観に対応する“*親密性の回避*（*Avoidance*)”と呼ぶ。これらの命名は，Brennan, Clark, & Shaver（1998）の“親密な対人関係体験尺度（以下，

Table 2
本研究の仮説[d]

(1)4カテゴリーの2次元と3カテゴリーの3因子の対応性					
		RSQ		RQ	
	IWM尺度	見捨てられ不安	親密性の回避	自己観得点	他者観得点
仮説1	安定型得点	−	−	+	+
仮説2	アンビバレント型得点	+	−	−	+
仮説3	回避型得点	+	+	−	−
(2)RQの強制選択にもとづく4つの愛着スタイル群と3カテゴリーの3因子の対応性					
	IWM尺度	RQの4つのスタイル群			
仮説4	安定型得点：	安定型	＞	拒絶型，とらわれ型，恐れ型	
仮説5	アンビバレント型得点：	とらわれ型	＞	安定型，拒絶型，恐れ型	
仮説6	回避型得点：	恐れ型	＞	安定型，拒絶型，とらわれ型	
(3)4カテゴリー尺度における尺度形式間の対応性					
仮説7		RQ			
	RSQ	自己観得点	他者観得点		
	見捨てられ不安（自己観に対応）	−			
	親密性の回避　（他者観に対応）		−		
仮説8	RSQ	RQの4つの愛着スタイル群			
	見捨てられ不安：	安定型，拒絶型	＜	とらわれ型，恐れ型	
	親密性の回避　：	安定型，とらわれ型	＜	拒絶型，恐れ型	

[d] 不等号は，有意差があると予測することを示す．＋は正の相関，－は負の相関があると予測することを示す．

[7] RSQは，“the Relationship Scales Questionnaire”の訳である（Griffin & Bartholomew, 1994, p.27)。RSQは，もともと4つの愛着スタイルそれぞれの得点を算出するために作成された尺度であるが，それら4つのサブスケールは，概念的に独立した自己観と他者観という2次元の組合せにより構成されているため，内部一貫性（α係数）は概して低かった（安定型＝.41～拒絶型＝.70）（Griffin & Bartholomew, 1994)。RSQを用いる際には，4つのサブスケールとして用いる場合もあるが（e.g., Fraley, Davis, & Shaver, 1998)，より内部一貫性の高い自己観に対応した“見捨てられ不安（Anxiety)”と他者観に対応した“親密性の拒絶（Avoidance)”の2因子を抽出するために用いる場合が多い（e.g., Roberts & Noller, 1998)。本研究は後者の立場である。

[8] 成人愛着スタイルを測定するためには，現段階では，GriffinらのRSQよりもBrennan et al.(1998）が開発したECR（脚注9参照）の方がより適切であると考えられる。その理由は，ECRはRSQを含むそれまでに開発された14の愛着スタイル尺度（計323項目）の2次的因子分析にもとづき開発されたものであるからだ（Brennan et al., 1998)。先程の14の愛着スタイル尺度がこれらを開発した研究者の愛着スタイルに関する考え方を反映しているとするならば，これら全ての尺度（因子）を一緒に2次的因子分析することで，研究者たちがより概念的に同意できかつ愛着スタイルのより中心的要素を最も反映する次元を抽出することができると考えられる（中尾・加藤，2002a)。しかし，本研究では次の3つの理由のためRSQを用いた。すなわち，(1)本研究はECRの日本語版作成（中尾・加藤，2002a）を行う前に実施されたものであること，(2)RSQは，ECRが開発される以前に（1990年代後半）よく用いられていたこと，(3)RSQの2因子は，ECRの2因子と概念的に類似していること（そのため，両者の因子名は同じである)，である。

ECR と略す)”[9]での命名に従ったものである[10]。

具体的な８つの仮説は Table 2 に示した。それらの仮説は，目的により次の３つにまとめられる。(1) 4 カテゴリーの２次元と３カテゴリーの３因子の対応性（仮説１～３），(2)RQ の強制選択にもとづく４つの愛着スタイル群と３カテゴリーの３因子の対応性（仮説４～６），(3) 4 カテゴリー尺度における尺度形式間（強制選択式，多項目式）の対応性（仮説７，８）である。

方　法

被験者　被験者は大学生211名（平均年齢20.37歳，男45名，女165名，無記入１名）であった[11]。

質問紙　質問紙は，フェイスシート（学部，学年，年齢，性別，現在の恋人の有無）と３つの愛着スタイル尺度（Table 1）から構成されていた。以下の尺度の評定は全て，７件法（1＝“全く当てはまらない”～7＝“非常によく当てはまる”）を用いた。

4 カテゴリー愛着スタイル尺度(1)　RSQ（Griffin & Bartholomew, 1994，加藤（1998a）訳）を用いた。RSQ は，親密な対人関係の中で現れる４カテゴリーの２次元（見捨てられ不安，親密性の回避）を測定するための多項目式尺度（30項目）である（教示と項目は Table 3 参照）。

4 カテゴリー愛着スタイル尺度(2)　RQ（Bartholomew & Horowitz, 1991，加藤（1998b）訳）を用いた。RQ は，親密な対人関係の中で現れる４カテゴリー愛着スタイルを測定するための強制選択式尺度である。回答に際し，被験者は４つの愛着スタイルの特徴が記述してある文章を読み，それぞれについて自分にどのくらいよく当てはまるかを７件法で評定した。次に，その４つの中から最もよく当てはまる愛着スタイルを１つ選択した。

RQ の用い方には２つの方法がある。１つは４つの記述への自己評定を用いて自己観得点と他者観得点をそれぞれ算出する方法であり（これらの算出方法は Table 1 参照），もう１つは最後に１つ強制選択されたものによりその人の愛着スタイルを決定する方法である（強制選択にもとづく４つの愛着スタイル群の割合は Table 5 参照）。

3 カテゴリー愛着スタイル尺度　IWM 尺度（戸田，1988）を用いた。この尺度は，３カテゴリーの３因子（安定型得点，アンビバレント型得点，回避型得点）を算出するための多項目式尺度（18項目）である。

本研究の被験者211名を対象に，IWM 尺度（18項目）について因子分析（最小２乗法・プロマックス回転）を行った。因子数の決定は，次の４つの観点から行った。すなわち，固有値（1.00以上），スクリー・テスト，因子負荷量（.35以上），解釈可能性の４つの観点である（以下での“４つの観点”は，これと同じである）。その結果，３因子解（17項目）が適当であると判断した（累積説明率は42.41%）。戸田（1988）の命名に従い，第１因子を“安定型”，第２因子を“回避型”，第３因子を“アンビバレント型”と命名した（因子間相関は，“安定型”と“アンビバレント型”が-.26，“安定型”と“回避型”が-.39，“アンビバレント型”と“回避型”が.12）。また十分な信頼性が得られた（α＝.71～.86）。

結　果

Griffin らの RSQ の因子的妥当性　RSQ の30項目について因子分析（最小２乗法・プロマックス回転）を行った。先述の４つの観点から，６項目を削除した２因子解（24項目）が適当であると判断した（回転後の因子パターンは Table 3 に示した）。RSQ を用いた従来の研究（e.g., Roberts & Noller, 1998）と同様に，Brennan et al.(1998) の命名に従い，第１因子を“見捨てられ不安（Anxiety）”，第２因子を“親密性の回避（Avoidance）”と命名した（以下では，それぞれを Anxiety と Avoidance と呼ぶ）。２因子による累積説明率は35.06%，因子間相関は.36であった。また，高い信頼性が得られた（Table 3）。したがって，日本語版 RSQ には因子的妥当性と内的整合性があることが確認できたと言える。

(1) 4 カテゴリーの２次元と３カテゴリーの３因子の対応性　仮説１から３を検証するために，RSQ の２因子，IWM 尺度の３因子，RQ の自己観得点と他者観得点の相関係数を算出した（Table 4 (1)）。その結果，Anxiety は安定型得点とはやや高い負の相関があり，アンビバレント型得点とは高い正の相関があった（換言す

[9] ECR は，“the Experiences in Close Relationships inventory”の略である（Brennan et al., 1998, p.69）。ECR の日本語版作成は，中尾・加藤（2002a）において行った。なお，親密な対人関係全般版 ECR（中尾・加藤，2002b），親友関係版 ECR（加藤，2001）の作成も行った。

[10] Brennan et al.(1998) は，４カテゴリー愛着スタイルのモデルの自己観と他者観について，“自己観がポジティブである”ということは“愛着対象から見捨てられるかもしれないという不安が低い”ということであり，“他者観がポジティブである”とは，“愛着対象との親密な関係を回避しない”ということであると考えた。したがって，*RSQ* において，*“見捨てられ不安が高い”とは“自己観がネガティブである”ということを，“親密性の回避が高い”とは“他者観がネガティブである”ということをそれぞれ意味する*（Fig.1）。

[11] RSQ には恋人に対する質問が３項目含まれていた。恋人あり群146名のみ，あるいは恋人なし群64名のみを対象とした分析を別々に行った場合でも，結果は基本的には同じであった。

Table 3
プロマックス回転後のRSQの因子パターン（*N*=209）[e]

項目	F1	F2
F1：見捨てられ不安（Anxiety）（α=.89）		
23. 私は他の人に見捨てられるのではないかと心配になる.	**.81**	−.12
16. 私が他の人のことを大切に思うほど，人は私のことを大切に思ってないのではないかと心配になる.	**.78**	−.15
09. 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する.（R）[f]	**.73**	−.16
28. 他の人がありのままの私を受け入れていないのではないかと心配になる.（R）	**.66**	.00
21. 私は，実は恋人が私と一緒にいたくないのではないかとよく心配になる.	**.64**	.03
18. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるために，他の人はうんざりして，時々私から離れていってしまう.	**.61**	−.16
07. いざ必要なときには，他の人がいつでも自分のために来てくれるかどうか，確信が持てない.	**.59**	.08
25. 他の人は私が望むほどには私と親しくなることに抵抗をもっていると思う.	**.58**	.16
11. 本当は恋人が私のことを愛していないのではないかとよく心配になる.	**.56**	−.07
17. いざ必要なとき，他の人はいつも自分（私）の側（そば）にいてくれない.	**.53**	.12
12. 他の人を完全に信じ切ることができない.	**.53**	.21
27. 必要なときには，いつも他の人は自分（私）の側（そば）にいてくれると思う.（R）	**.46**	.17
05. 他の人とあまりにも親しくなりすぎると傷ついてしまうのではないかと心配になる.	**.42**	.14
F2：親密性の回避（Avoidance）（α=.82）		
26. 私は他の人に頼ることが好きではない.	−.10	**.76**
10. 私は他の人に頼ることに抵抗がない.（R）	−.09	**.59**
01. 私は，他の人に頼るのが苦手である.	−.13	**.55**
30. 私は比較的容易に他の人と親しくなれると思う.（R）	.03	**.54**
22. 他の人に頼ってもらいたくない.	.06	**.52**
03. 私は容易に他の人と親しくなれると思う.（R）	.09	**.51**
20. 私は，他の人が私に必要以上に親しくなろうとすることが好きではない.	−.05	**.50**
15. 私は他の人に頼られることに抵抗を感じない.（R）	.04	**.49**
24. 私は他の人と親しくなることに抵抗を感じる.	.20	**.48**
02. 私にとって大切なのは，他の人に頼っていないと感じることだ.	−.05	**.39**
13. 私は，他の人が自分に親しくなりすぎるのではないかと心配になる.	.19	**.39**

削除された項目

04. 私は，気持ちの上で他の人と完全に一つになりたい.
06. 私は，いつも心が通じ合う関係がなくても平気だ.
08. 私は他の人と完全に気持ちが通じ合うようになりたい.
14. 私は親密な関係が持ちたい.
19. 私にとって大切なのは，自分で何でもできていると感じることだ.
29. 恋人は，私が望んでいる以上に，親密になることを私によく求める.

[e] 因子負荷量は，全体の30項目から6項目を除いた計24項目についての因子分析の結果にもとづいている．項目番号は，Griffin & Bartholomew（1994）の表と同じである．教示は次の通りであった：下の文章はあなた自身の考え方や感じ方にどのくらいよく当てはまると思いますか？下の7段階で評定してください．下線は真ん中です．なお，恋人との関係についての質問が出てきますが，恋人がいない人は，もしいたとしたらどうかを答えてください（評定尺度：全く当てはまらない　1—2—3—4—5—6—7　非常によく当てはまる）．

[f] （R）は逆転項目である．

Table 4
RSQ，IWM尺度，RQの自己観得点と他者観得点の相関[g]

尺度名	サブスケール	RSQ		RQ	
		見捨てられ不安（自己観に対応）	親密性の回避（他者観に対応）	自己観得点	他者観得点
(1)IWM尺度	安定型得点	−.35 **	−.64 **	.30 **	.49 **
	アンビバレント型得点	.68 **	.20 *	−.66 **	−.18 *
	回避型得点	.32 **	.72 **	−.11	−.62 **
(2)RQ	自己観得点	−.64 **	−.14 *		
	他者観得点	−.27 **	−.71 **	.17 *	

[g] ** $p<.01$，* $p<.05$である．

Table 5
RQの４つの愛着スタイル群におけるIWM尺度，RSQの平均値（*SD*）[h]

（自己観，他者観）[i]		RQの４つの愛着スタイル群 安定型（P，P）（*N*=51）（26.42%）	拒絶型（P，N）（*N*=20）（10.36%）	とらわれ型（N，P）（*N*=79）（40.93%）	恐れ型（N，N）（*N*=43）（22.28%）	*F*
(1) IWM尺度						
安定型得点	*M*	4.82 a	3.38 b	3.86 b	3.43 b	*F* (3, 189)=14.79 **
	(*SD*)	(.99)	(.84)	(1.22)	(1.23)	
アンビバレント型得点	*M*	3.07 b	3.43 b	4.29 a	4.42 a	*F* (3, 189)=28.05 **
	(*SD*)	(.99)	(.85)	(.81)	(.83)	
回避型得点	*M*	2.57 b	3.88 a	2.96 b	3.77 a	*F* (3, 189)=16.95 **
	(*SD*)	(.87)	(.49)	(1.00)	(1.16)	
(2) RSQの２因子						
見捨てられ不安（自己観に対応）	*M*	2.52 c	3.33 b	4.02 a	4.06 a	*F* (3, 189)=35.18 **
	(*SD*)	(.90)	(.70)	(.86)	(1.00)	
親密性の回避（他者観に対応）	*M*	2.52 c	3.97 a	2.96 b	3.74 a	*F* (3, 189)=27.10 **
	(*SD*)	(.72)	(.68)	(.74)	(.99)	

[h] 異なった文字は，5%水準で有意であった（Tukey の *HSD* 検定）．また** $p<.01$である．
[i] Pはポジティブであり，Nはネガティブである．

ると，RQの自己観得点は，安定型得点とはやや高い正の相関があり，アンビバレント型得点とは高い負の相関があった）。また，Avoidance は安定型得点とはやや高い負の相関があり，回避型得点とは高い正の相関があった（換言すると，RQの他者観得点は，安定型得点とはやや高い正の相関があり，回避型得点とは高い負の相関があった）。

したがって，仮説１は支持されたが，仮説２と３は一部のみ支持された。すなわち，多項目式尺度において，４カテゴリーの２次元は３カテゴリーの３因子との間に

対応性はあるが，IWM尺度のアンビバレント型得点や回避型得点は，とらわれ型や恐れ型の特徴を表しているというよりはむしろ，それぞれ自己観や他者観との間に密接な関連があるということが示唆された。

(2) 4つの愛着スタイル群と3カテゴリーの3因子の対応性　仮説4から6を検証するために，IWM尺度の3因子の平均値それぞれについて，RQの強制選択にもとづく4つの愛着スタイル群間で差異があるかどうかを，1元配置分散分析により検討した（Table 5 (1)）。その結果，自己観と他者観がともにポジティブな安定型は，それ以外の3つの愛着スタイル（型）に比べて安定型得点が有意に高かった。次に，自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は，自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べて，アンビバレント型得点が有意に高かった。また，他者観がネガティブな拒絶型や恐れ型は，他者観がポジティブな安定型やとらわれ型に比べて，回避型得点が有意に高かった。

したがって，仮説4は支持されたが，仮説5と6は支持されなかった。すなわち，RQの強制選択にもとづく4つの愛着スタイル群により3カテゴリーの3因子の得点が異なることから次の3点が示唆された：(1)安定型得点は安定型の特徴を表している。(2)アンビバレント得点はとらわれ型の特徴を表しているというよりはむしろ，とらわれ型や恐れ型の特徴を表している。(3)回避型得点は恐れ型の特徴というよりむしろ，恐れ型や拒絶型の特徴を表している。

(3) 4カテゴリー尺度における尺度形式間の対応性　仮説7を検証するために，RSQの2因子とRQの自己観得点，他者観得点との相関係数を算出した（Table 4 (2)）。その結果，仮説7は支持されていた。すなわち，AnxietyはRQの自己観得点と負の相関があった。そして，AvoidanceはRQの他者観得点と負の相関があった。

仮説8を検証するために，RSQの2因子の平均値それぞれについて，RQの4つの愛着スタイル群間で差異があるかどうかを，1元配置分散分析により検討した（Table 5 (2)）。その結果，仮説8は支持されていた。すなわち，自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は，自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べて，Anxiety得点が有意に高かった。また，他者観がネガティブな拒絶型や恐れ型は，他者観がポジティブな安定型やとらわれ型に比べて，Avoidance得点が有意に高かった。以上の2つの仮説に関する結果より，4カテゴリー尺度における多項目式（RSQ）と強制選択式（RQ）という尺度形式間の対応性は確認されたと言える。

考　察

以上の結果をまとめると，次の3つになる。すなわち，(1) 4カテゴリーの2次元と3カテゴリーの3因子の対応性：IWM尺度の安定型得点は自己観と他者観の両方とやや強い相関があった。それに対して，アンビバレント得点や回避型得点は，自己観あるいは他者観のいずれか一方と強い相関があった。(2) 4つの愛着スタイル群と3カテゴリーの3因子の対応性：IWM尺度の安定型得点ではRQの安定型がそれ以外の3つの愛着スタイル（型）に比べて得点が有意に高かった。それに対して，アンビバレント型得点ではとらわれ型と恐れ型の2群が，また回避型得点では恐れ型と拒絶型の2群が，それ以外の2つ愛着スタイル（型）に比べて得点が有意に高くなった。(3) 4カテゴリー尺度における尺度形式間：強制選択式と多項目式との間の対応性は確認されたと言える。

(1)と(2)の対応性について，Table 4 (1)とTable 5をFig.1の4カテゴリー愛着スタイルモデルに照らし合わせながら，次の3点について考察してみたい。第1に，IWM尺度のアンビバレント型得点とFig.1の4カテゴリー愛着スタイルのモデルの対応性について考察する。Table 4 (1)からは，アンビバレント型得点がRSQのAnxiety（自己観に対応）と密接に関連していた。さらに，Table 5より，自己観がネガティブな愛着スタイル群（とらわれ型や恐れ型）は，自己観がポジティブな愛着スタイル群（安定型や拒絶型）に比べて，Anxiety得点と同様にアンビバレント型得点も高かった。これら2つの結果から，IWM尺度のアンビバレント型得点は，アンビバレント型の特徴であるというよりはむしろ4カテゴリー愛着スタイルモデル（Fig.1）の“自己観”に対応していると考えられる。

第2に，IWM尺度の回避型得点とFig.1の4カテゴリー愛着スタイルのモデルの対応性について考察する。Table 4 (1)からは，回避型得点がRSQのAnxiety（他者観に対応）と密接に関連していた。さらに，Table 5より，他者観がネガティブな愛着スタイル群（拒絶型や恐れ型）は，他者観がポジティブな愛着スタイル群（安定型やとらわれ型）に比べて，Avoidance得点と同様に回避型得点も高かった。これらのことから，IWM尺度の回避型得点は，4カテゴリー愛着スタイルモデル（Fig.1）における“他者観”に対応していると考えられる。

第3に，IWM尺度の安定型得点とFig.1の4カテゴリー愛着スタイルのモデルの対応性について考察する。Table 4 (1)からは，安定型得点がAnxietyとAvoidanceの両方と関連していた。さらに，Table 5 (1)より，自己観と他者観がともにポジティブな安定型は，他の3つの愛着スタイルに比べて安定型得点が高かった。これらのことから，IWM尺度の安定型得点は，4カテゴリー愛着スタイルの安定型（Fig.1）の特徴を測定していると想定される。だが，戸田のIWM尺度の項目を詳細に検

討すると，安定型得点は，愛着[12]そのものというよりはむしろ，社交性や対人関係に入っていく際の円滑さ（はじめて会った人と親密になりやすいかどうか）といった愛着スタイルと関連する諸特徴を測定しているようにも考えられる（e.g.，“私はすぐに人と親しくなる方だ”，“私は知り合いができやすい方だ”）。IWM 尺度の安定型得点が何を反映するものかという問題については今後さらなる検討が必要であろう。

以上の考察をまとめると次のようになる。すなわち，多項目式３カテゴリー尺度を４カテゴリー愛着スタイルモデルの観点から整理すると，(1)アンビバレント型得点は，４カテゴリー愛着スタイルを構成する自己観に対応する。(2)回避型得点は４カテゴリー愛着スタイルを構成する他者観に対応する。(3)安定型得点が何を反映するものかについては現段階では不明瞭である。今後はこれら３つの想定にもとづき，３カテゴリー尺度を用いて得られた知見を４カテゴリー愛着スタイルモデルの観点から解釈することが必要となるであろう。

どの愛着スタイル尺度を用いればよいのか　それでは，これから成人愛着研究に関わろうとする研究者はどの愛着スタイル尺度を用いればよいのだろうか。(1)近年４カテゴリー尺度を用いた研究が増加していること，(2)３カテゴリー愛着スタイルは４カテゴリー愛着スタイルのモデルから解釈することが可能であることの２点を考慮するならば，４カテゴリー尺度を用いることが現段階では最も適切であると考えられる。

それでは，４カテゴリー愛着スタイル尺度（RQ, RSQ, ECR, ECR-R[13]（Fraley, Waller, Brennan, 2000; ECR の改訂版））のどれを用いればよいのだろうか。

①愛着と他変数との相関関係を捉えるためには，４カテゴリーの２次元（i.e.，自己観，他者観）を量的に捉える必要がある。強制選択式の RQ からも４カテゴリーの２次元を量的に捉えることはできるが（Griffin & Bartholomew, 1994），より数量的に扱いやすい ECR あるいは ECR-R（多項目式の尺度）を実施する方がよいと考えられる（RSQ を用いない理由は脚注８参照）。

②４つの愛着スタイル群（i.e.，安定型，拒絶型，とらわれ型，恐れ型）に被験者を分類し，それらの群による他の変数の平均値の差異を明らかにしたい場合には，RQ の強制選択による自己分類法を実施することがよいと考えられる。その理由は次の点による。多項目式の４カテゴリー尺度からは４つの愛着スタイル群を決定することが，現時点では，困難である。また，仮に決定できたとしても RQ の強制選択にもとづく４つの愛着スタイル群との一致率はあまり高くない（e.g., Brennan et al., 1998）。この問題については，今後さらなる研究が必要であろう。

③４カテゴリーの２次元を用いて得られた結果を４つの愛着スタイル群を用いて更に確認したい場合（あるいはその逆の場合）には，多項目式の尺度（ECR, ECR-R）と強制選択式の尺度（RQ）の両者を実施することがよいと考えられる。というのは，現時点では他変数における愛着スタイルの特徴をより適切に捉えるためには，４カテゴリーの２次元と４つの愛着スタイル群のどちらを用いた方がより適切なのかが不明瞭なためである。多くの研究では，Fraley, Garner, & Shaver（2000）の主張に従い（脚注４参照），愛着スタイルを測定する際に４カテゴリーの２次元のみ用いている。しかし一方で，Neidenthal, Brauer, Robin, & Innes-Ker（2002）では，４カテゴリーの２次元は情動の表情表出に対する知覚との間に有意な相関関係がなかったのに対して，４つの愛着スタイル群によるそれらの得点の差異は有意であったという結果が得られた（その理由は，情動の表情表出に対する知覚において，４カテゴリー愛着スタイルモデル（Fig. 1）の対角線上に位置するとらわれ型と拒絶型が同じような反応を示したためである）。したがって，４カテゴリー愛着スタイルモデル（Fig. 1）の対角線上に位置する２つの愛着スタイルが同じような反応を示す可能性があると想定する場合には，４カテゴリーの２次元を用いて得られた結果を４つの愛着スタイル群を用いて更に確認する必要があろう。

[12] 愛着とは“守ってくれるということにおける確信（confidence in protection）”と定義することができる（Goldberg, 1999; 数井（2001）訳）。

[13] ECR-R は，“Experiences in Close Relationship Questionnaire-Revised”の略である（Fraley et al., 2000, p.360）。ECR と ECR-R は同じ項目プールから作成されており，前者は２次的因子分析にもとづき作成されているのに対して，後者は項目反応理論にもとづき作成されている。ECR と ECR-R との項目の重なりは，“見捨てられ不安”では13項目（72%），“親密性の回避”では７項目（39%）であった（Fraley et al., 2000）。心理測定的属性という点では，ECR-R は，ECR に比べて若干優れている（Fraley et al., 2000）。

引用文献

Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.

Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss*. Vol.2. *Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.

Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.),

Attachment theory and close relationships. New York: The Guilford Press. Pp.46-76.

Brennan, K.A., Shaver, P. R., & Tobey, A. E. 1991 Attachment styles, gender and parental problem drinking. *Journal of Social & Personal Relationships*, **8**, 451-466.

Fraley, R.C., Davis, K.E., & Shaver, P.R. 1998 Dismissing-avoidance and the defensive organization of emotion, cognition, and behavior. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. Pp.249-279.

Fraley, R.C., Garner, J.P., & Shaver, P.R. 2000 Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 816-826.

Fraley, R. C., & Shaver, P. R. 1998 Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1198-1212.

Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A. 2000 An item-response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 350-365.

Goldberg, S., Grusec, J. E., & Jenkins, J. M. 1999 Confidence in protection: Arguments for narrow definition of attachment. *Journal of Family Psychology*, **13**, 475-483.

Griffin, D.W., & Bartholomew, K. 1994 The metaphysics of measurement: The case of adult attachment. In K. Bartholomew & D. Parlman (Eds.), *Advance in personal relationship*, **5**, *Attachment process in adulthood*. London: Jessica Kingsley Publishers Ltd. Pp.17-52.

Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Conceptualizing romantic love as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.

加藤和生 1998a 4カテゴリー愛着スタイル多項目式質問紙. 九州大学人間環境学研究院心理学教室(未公刊).

加藤和生 1998b 4カテゴリー愛着スタイル強制選択式質問紙. 九州大学人間環境学研究院心理学教室(未公刊).

加藤和生 2001 親友版ECR作成の試み. 九州大学人間環境学研究院心理学教室(未公刊)

数井みゆき 2001 日本人母子における愛着の世代間伝達:家族背景および文化的特徴はどのように関連するのか. 九州大学大学院人間環境学府コロキウム配付資料(未公刊).

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research*. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 66-104.

中尾達馬・加藤和生 2002a 成人愛着スタイル尺度(Brennan et al., 1998)の日本語版作成の試み. 九州大学人間環境学研究府心理学教室(未公刊).

中尾達馬・加藤和生 2002b 一般的他者版ECR作成の試み. 九州大学人間環境学研究府心理学教室(未公刊).

Niedenthal, P. M., Brauer, M., Robin, L., & Innes-Ker, Å. H. 2002 Adult attachment and the perception of facial expression of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 419-433.

大石史博・宇恵弘 2000 青年期における愛着の基礎的研究(1):成人用愛着尺度作成の試み. 関西福祉科学大学紀要, **4**, 79-86.

Roberts, N. & Noller, P. 1998 The associations between adult attachment and couple violence: The role of communication patterns and relationship satisfaction. In J. A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. Pp.317-350.

託摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.

戸田弘二 1988 青年後期における基本的対人態度と愛着スタイル:作業仮説(working models)からの検討. 日本心理学会第52大会発表論文集, 27.